

# 【ねがいはしては】

平成29年8月25日

KYOWA SCHOOL

第322号

「教えられて」

私が灰谷健次郎さんの作品に出会ったのは、もう30年近くも前のこと、それも生徒さんからです。ある子から「兎の眼」、ある子から「ワルのポケット」つまり2人から……。灰谷さんは小学校教師を17年務められ、常に子どもの立場に立ち、社会から受ける矛盾に立ち向かわれました。すでに他界されましたが、その意思は今でも私に大きく影響を与えています。今回の入院で、改めて灰谷作品を見直す良い機会を戴きました。(ベッドでゆっくりと目を通すことが出来ました。)

買っていただいたのに読まずじまいであったそれらの灰谷文学たちの中の一冊、茶色く変色していました。「いま、島で」というエッセイ集です。

当時、灰谷作品が世の中から脚光を浴び、テレビやラジオで取り上げられ、灰谷さんご自身も忙しい日々を送られていた頃、九州小倉のサイン会場にひとりの娘さんが来ます。その娘さんはわざとあとから来る方々に順番を譲り、最後になって灰谷さんに何かを告げようとしします。声にならず、嗚咽を絡めながら必死に……。

それは小学校から登校拒否児だったこと。中学・高校とほとんど学校に行っていないこと。幼い頃、父をガンでなくし、何とか学校へ行かそうとする母とは地獄の日々であったこと。今日の今日まで死ぬことばかりを考えて生きてきたこと。腕には自傷で傷ついた傷が幾筋もあること。そして彼女から最後に発せられたことばを記します。

「わたしはいろいろあった苦しいことを灰谷さんにきいてもらいたくて話をしにきたのではないのです。灰谷さんの本を読み、灰谷さんの話をきき、わたしは生きようと思いました。その生きる決心を灰谷さんにきいてもらいたくて、灰谷さんの前にきたのです。ありがとうございます。」「生きます。何があっても……。」

美しい……。灰谷さんと、この娘さんの出会いが美しい……。純粋にそう感じました。

灰谷さんは言っています。

『教師にとって、子どもを教え導くことが先ではなく、子どもが哀しんでいればその哀しみを、子どもが涙をこぼしていればその涙を、いっしょに背負うことが必要であって教え導くことはそれからいいのだというのがぼくの持論だ。』

以前からそれに近い気持ちを抱いていたところへ、この言葉……。

「添う」……。子どもの目線に添う。ここに添う。これがあってはじめて子どもたちはこころを開き、微笑んでくれる。それは教師だけではない、子どもたちを取り巻く様々な人たちが、皆共通した思いで見つめることが必要です。

先ほどの娘さんが、もし灰谷作品に出会っていなかったら、どんな人生を歩んでいたのかと思うと……。

人生は出会いだとよく言いますが、それが「運」などという一文字でかたづけられていいのでしょうか。今、まさに今、私たちは子どもたちに寄り添うこと、まず足もとをしっかりと見つめてあげること。安心して歩ける靴を履いていますか。靴下はしっかりと毎日取り替えていますか。その足を毎日洗っていますか。

つまり、下から子どもたちを見つめてあげる。いつも上からばかり見つめていては、子どもたちの足のおいも分かりません。

子どもたちが望むもの……。そっと見守ってくれる温かいまなざし。背中に感じる安心を、あたたかい毛布のように感じながら机に向かうことができる。そんな家……。

信頼という二文字をしあわせに繋げ、この家の一員で良かったと自然な気持ちで毎日を送ることができる。それを当たり前と片付けることなく、「ありがとう」に変化させながら日々を送る……。それが子どもたちがこころから願っている、何気ない普段の生活ではないかと思えます。当たり前な、自然な、そんな生活……。

先ほどの娘さんは、これから先の自分をどうか優しく見守ってくださいと報告に来たのだと思えます。

いつ、どんな時でもそっと見守っていてくれる……。

勉強面で、ついつい言葉が出てしまう……。これは成績という社会が作り上げたルールが正しいことだと認めてしまっているからこそ出てしまう言葉……。しかし子どもたちはどんなに懸命に向かっても、上手くいかないこともあります。これは大人社会の方でも多いはずで。といますかそれが当たり前。

勉強が嫌い……。なぜきらいになってしまったのか、寄り添うことが家族の努めではないでしょうか。目先にあるテストの結果だけでは、子どもたちは救われません。最も苦しんでいるのは当事者本人。それを持ち前の「楽天性」で蹴飛ばしながらたくましく生きる子どもたち……。偉いよなー。楽天性は子どもがもつ特有の得意技。

大人はなかなかそう上手いきません。うつ病って大人が多いですよ。子どもはそんなことお構いなし、結構すぐ夢中になって遊び始めます。なぜなんだろう。家族が注ぐあたたかい毛布のような眼差しを、いつも信じているからです。お父さんが会社で上手くいかないことがあっても、そっと見守ってあげるお母さん。子が学校で上手くいかなくても、そっと見守る温かい眼差しのお母さん。「期待」は、イライラの原因菌です。美しい出会いを……。毎日。